様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：３３９０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０４３２０

研究課題名（和文）高齢者の自己複雑性因果モデルの精緻化および介入プログラムの開発

研究課題名（英文）Elaboration of a causal model of self-complexity for the elderly people and development of the intervention Program

研究代表者
中原　純（Nakahara, Jun）

中京大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：２０５４７００４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、「① P-SCやN-SCと1つの自己側面における事象の関連性をパネルデータを用いて検討すること」、「② パネルデータを用いて、時間的に先行するSC指標が主観的well-beingと関連するかどうか」を検討することを目的とする調査を実施した。分析の結果から、自己複雑性は1つの側面に起きた事象により変化する可能性は低いこと、自己複雑性の側面数は人生満足度とは直接的に関連するが、それ以外の自己複雑性と主観的well-beingの指標間に関連性はみられないことが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、多くの集団に所属したり、役割を持っている中高年者の方が人生に満足している傾向があることが示され、集団に所属していることや役割を持っていることの重要性が示唆された。中高年者の主観的well-beingの維持・向上のためには、各人の自己の構造に留意する必要があることを示唆した点において、社会的および学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this study, we conducted a survey aimed at examining "(1) the association between P-SC and N-SC and events on one self-aspect using panel data" and "(2) whether time-precedent SC indicators are associated with subjective well-being using panel data". The results of the analysis indicated that self-complexity is unlikely to be altered by events occurring in one aspect, and that the number of aspects of self-complexity is directly related to life satisfaction, but that no association is found between other indicators of self-complexity and subjective well-being.

研究分野：社会心理学

キーワード：中高年者　主観的well-being　自己複雑性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

高齢者の社会関係の豊かさが主観的 well-being（SWB）と関連することは多くの研究で指摘されているが、多様な関係性の交互作用については十分な研究が少ない。本研究では、従来の活動理論（AT）では明確にしきれなかった社会関係の交絡要因が SWB へ与える影響を考慮するために、自己複雑性（SC）因果モデル（「１．P-SC の高い高齢者は、役割に関するネガティブな事象が及ぼす RI への負の影響が小さいため、SWB は高く維持される」、「２．N-SC の高い人は、役割に対するネガティブな事象が及ぼす RI への負の影響が促進される。RI が低下した結果として、SWB も低下する」）を生成し、前向き調査を通して、実証を試みる。加えて、P-SC を向上させる介入プログラムを開発することで、社会心理学の知見を地域社会へ寄与する。

２．研究の目的

研究開始当初の研究目的では、P-SC を向上させる介入プログラムの開発も目的としていた。しかし、2020 年より我が国において新型コロナウィルスが蔓延したことにより、予定していた地域在住高齢者の協力が得られない状況となった。また、研究期間中に自己複雑性概念に関する理論的進展がみられたことから、当初の目的から介入プログラムの開発は断念し、SC 因果モデルの精緻化に目的を特化し、さらに一部の仮説を変更することで実証を試みた。

以下、新たな研究目的を説明する。まず、当初は役割に関する事象が単一の役割アイデンティティによる主観的 well-being を調整することを想定したが、そもそも役割に関する事象と SC の関連性が明確でなかったことから、「① P-SC や N-SC と事象の関連性をパネルデータを用いて検討する」ことを目的とした。また、これまで自己複雑性と主観的 well-being の関連は、同一時点において測定した指標間の関連性において示されたものであった。そこで、本研究では、「② パネルデータを用いて、時間的に先行する SC 指標が主観的 well-being と関連するかどうか」について検証した。その際、SC を Linville's「H」（Linville, 1985; 1987）によって求められたものだけでなく、榊（2006）によって提案された側面数とオーバーラップ度の指標も同時に用いて検討した。

３．研究の方法

目的①および②について、2016 年に実施した調査の対象者に対して、2019 年に再度調査を依頼した。その後、同意の得られた対象者に対し、2 回目の調査を実施した。なお、2016 年に実施した調査は、調査会社 A 社に登録する 50—74 歳のモニターで、何らかの収入を伴う就労を行っている 348 名（M_{age} = 60.23, SD_{age} = 6.32, 男性 203 名, 女性 145 名）が対象であった。この対象者に対し、川人（2015）が実施した方法に従い、Linville's「H」が算出可能な調査項目を訪ねている。

2019 年の調査では、回答の得られた対象者から、単一の自己側面として設定した就労者としての役割を維持している中高年者 161 名（M_{age} = 58.75, SD_{age} = 6.02, 男性 90 名, 女性 71 名）を分析対象とした。調査内容は、「1. 2016 年の 1 回目の調査以降、2019 年の 2 回目の調査時点までの間における就労に関するポジティブおよびネガティブな事象の有無とその内容の自由記述」、主観的 well-being に関する人生満足度尺度（大石, 2009）、短縮版感情的 well-being 尺度（中原, 2011）、生活満足度尺度（古谷野他, 1989）を訪ねた。

なお、2019 年の調査については、中京大学現代社会学部・社会学研究科における研究倫理審査（2018-001）において承諾が得られた後に実施した。

４．研究成果

まず、目的①について、2016 年調査から 2019 年調査時点までに、ポジティブな事象が起こったと回答した人は 80 名であり、ネガティブな事象が起こったと回答した人は 56 名であった。各事象の内容については、表 1 に示した。

表１　事象の具体的内容

ポジティブ事象の自由記述例	ネガティブ事象の自由記述例
未だに仕事が有る事。	自分が思っていたよりも、課価が高くなかった。
６０才を過ぎて資格をとり、会社に役立てて気分がよい。	正社員（２９才）から、今まで会社をやめた方は、私が原因と言われた。
仕事の手が早くなった。お客様から感謝の言葉をもらった。多くの人と話しができた。	年収が少なくなった。
責任ある仕事をまかせてもらえるようになった。	同僚と仕事のやり方で対立があった。暴言をはいたり、ケンカ腰になることもしばしばあった。
前回より新しい仕事が増えた。	短い労働時間の中で、仕事をしなければならず、時間配分に苦労した。
同僚との関係が以前より良くなった。何でも話せるようになった。	職場で転倒してケガをした。
外国の友人ができた。新しい事業に取り組む。プログラムの勉強をはじめた	担当店ポが閉店になった。異動になり新しい店ポになった。
パートながら、手術で入院しても、１年契約をして頂けたことも病院の方々のおかげで続けて勤務できることになった。私の席があったということです。	会社側より契約しないと言われたが、病院側で私の勤務をみとめてくれた、会社のたいどの悪さを感じた。
役員（社長）へ就任した。	仕事のやり方が２年半の間に３度位かわった。覚えなおす事は大変な事と思った。

次に、P-SC を従属変数、ポジティブな事象の有無および時点を独立変数とする 2 要因分散分析を実施した結果、ポジティブな事象の主効果（$F = 6.67, p < .05$）が有意であり、多重比較の結果、2016 年および 2019 年の P-SC ともに、ポジティブな事象があった人の方が高かった（図 1）。また、N-SC を従属変数、ネガティブな事象の有無および時点を独立変数とする 2 要因分散分析を行った結果、ネガティブな事象の主効果（$F = 11.17, p < .01$）が有意であり、多重比較の結果、2016 年および 2019 年の N-SC ともに、ネガティブな事象があった人の N-SC は高かった（図 2）。

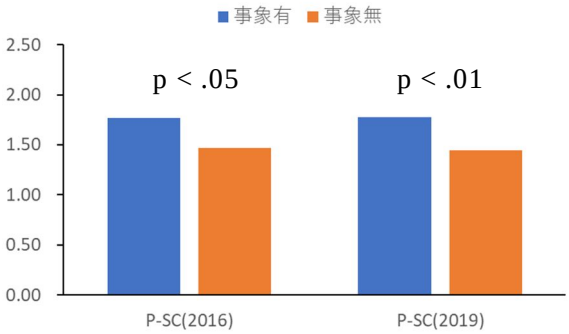

図 1. ポジティブ事象の有無による P-SC の違い

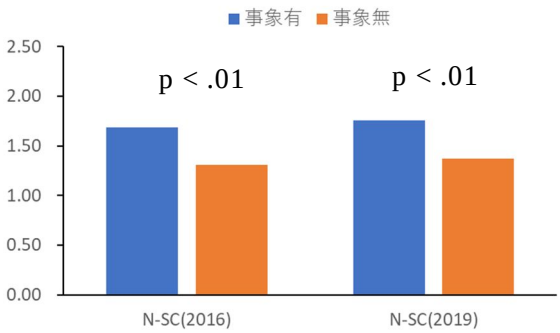

図 2. ネガティブ事象による N-SC の違い

目的②については、2016 年に取得したデータから、SC、P-SC および N-SC を Linville's「H」で算出した指標、榊（2006）の側面数およびオーバーラップ度を計算した指標を用い、2019 年に取得した人生満足度、ポジティブ感情、ネガティブ感情、生活満足度との相関係数を算出した（表 2）。その結果、側面数が多い人の方が人生満足度は高い傾向（$r = .112, p < .05$）が示されたが、それ以外の自己複雑性の指標と well-being の指標の間には相関関係がみられなかった。

表 2　自己複雑性指標（2016 年）および主観的 well-being 指標の相関行列

	Linville's 「H」			榊（2006）の指標	
	SC	P-SC	N-SC	側面数	オーバーラップ度
人生満足度	0.081	0.090	0.043	0.112 *	0.084
ポジティブ感情	0.084	0.069	0.084	0.038	-0.027
ネガティブ感情	-0.055	-0.045	-0.062	-0.023	0.069
生活満足度	0.013	-0.014	0.042	-0.030	-0.027

分析結果をまとめると、自己複雑性は 1 つの側面に起きた事象により変化する可能性は低いこと、自己複雑性の側面数は人生満足度とは直接的に関連するが、それ以外の自己複雑性と主観的 well-being の指標間に関連性はみられないことが示された。以上から、P-SC（N-SC）が高い人は 1 つの自己側面でのポジティブな（ネガティブな）事象を認知しやすい傾向が示唆された。また、自己複雑性と主観的 well-being の関連は、1 つの自己側面を考慮しない、直接的な関連は限定的であることも示唆された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Toyoshima Aya、Nakahara Jun	４．巻 12
２．論文標題 The Effects of Familial Social Support Relationships on Identity Meaning in Older Adults: A Longitudinal Investigation	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Frontiers in Psychology	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsyg.2021.650051	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中原純	４．巻 21
２．論文標題 シルバー人材センター活動者アイデンティティが感情的well-beingに与える影響	５．発行年 2019年
３．雑誌名 地域ケアリング	６．最初と最後の頁 82-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 正田悠・安田晶子・中原純・田部井堅一・伊坂忠夫	４．巻 90
２．論文標題 短縮版音楽による気分調整尺度（B-MMR）の日本語版の作成および信頼性・妥当性の検証	５．発行年 2019年
３．雑誌名 心理学研究	６．最初と最後の頁 398-407
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4992/jjpsy.90.18207	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中原純	４．巻 41
２．論文標題 中高年者の自己概念と主観的well-beingの関係ー活動理論の再考を通してー	５．発行年 2019年
３．雑誌名 老年社会科学	６．最初と最後の頁 342-347
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中原純	４．巻 21
２．論文標題 高齢者の社会活動が主観的well-beingへ及ぼす影響―自己複雑性を導入した新しい活動理論の提案―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 地域ケアリング	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　3件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 中原純
２．発表標題 高齢者の対人関係：活動理論を心理学的に考える
３．学会等名 認定心理士の会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 中原純
２．発表標題 自己の単一側面に関する事象の発生と自己複雑性の関連ー中高年者のパネルデータを用いた検討ー
３．学会等名 日本社会心理学会第61回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 中原純・田渕恵
２．発表標題 大学生のプロ野球観戦に対する家族要因の検討ー東海地域における中日ドラゴンズファンの分析を通してー
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 針金まゆみ・中原純
２．発表標題 シルバー人材センターにおける就業ストレッサーに影響する要因ー2年間のパネルデータを用いた潜在成長曲線モデルよりー
３．学会等名 日本老年社会科学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中原純
２．発表標題 社会的つながりは本当に高齢者の幸せを育むか？ー活動理論を再考するー
３．学会等名 日本老年行動科学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 福井幸子・安岡砂織・矢野久子・大西香代子・中原純
２．発表標題 B型肝炎患者が医療場面で体験した.医療者の倫理的行動
３．学会等名 日本看護科学学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中原純
２．発表標題 高齢者の自己概念と主観的well-beingの関係
３．学会等名 日本老年社会科学会第60回大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Nakahara, J.
２．発表標題 The relationship between self-complexity and subjective well-being among middle-aged and older adults.
３．学会等名 The Second International Conference on Well-Being（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 中原純
２．発表標題 就労者アイデンティティとポジティブ感情の関連―自己複雑性の調整効果―
３．学会等名 第59回日本老年社会科学会大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 中原純・唐澤真弓
２．発表標題 対人関係満足度および自尊感情の因果分析―年齢による因果関係の違い―
３．学会等名 日本社会心理学会第58回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Nakahara, J., Karasawa, M., Kawakami, N., & Ryff, C. D.
２．発表標題 Age-related differences in the direction of causality between self-esteem and marital relationship satisfaction in the US and Japan.
３．学会等名 The 19th SPSP annual meeting.（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

1．著者名 佐藤　眞一	4．発行年 2022年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 320
3．書名 心理老年学と臨床死生学	

1．著者名 中原純・佐藤眞一他	4．発行年 2019年
2．出版社 北大路書房	5．総ページ数 146
3．書名 高齢者心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関